故事成語諺語辞典

高橋源一

高橋源一郎著

故事成語諺語辞典

明治書院

昭和三十七年九月十五日　初版発行
昭和五十三年九月二十日　十五版発行

故事成語諺誌辞典
定価　金二四〇〇円

著者　高橋源一郎
東京都千代田区神田錦町一丁目十六番地
発行者　株式会社　明治書院
代表者　三樹彰
東京都千代田区三崎町三丁目三番三号
印刷者　石井印刷所
代表者　石井茂生

著者との申しあわせにより検印を略します
不許複製
発行所　株式会社　明治書院
（東京都千代田区神田錦町一丁目）
（振替口座東京三-四九九一番）
郵便番号　一〇一番
電話東京（292）三七四一（代）

0581—10104—8305　高陽堂製本

はしがき

一、我等が古書を読むにしても、演説をするにしても、文章を作るにしても、日常の会話をするにしても、故事成語諺語ほど重要にして興味のあるものはあるまい。

一、是等の語は何れも何千年或は何百年の昔から、人の口に慣れ用いられて来たもので、深く我等の心の底までひびいて、共鳴を感じさせる一種の大きな力を持って居る。世の中が如何に変ろうとも、当分是等の言葉のすたれる時期は来ないであろう。

一、我が国の故事成語諺語は多くは源をアジア大陸に発する。アジア大陸古代の文化人は、故事や諺語・譬喩を作ってこれを用いるに極めて巧妙であった。古代中国の説客（ぜいかく）と呼ばれる政論家の如きは、好んで是等の語を用いて諸侯王を説き廻り、自説を主張する材料とした。印度及び西方諸国の仏教徒も盛んに譬喩や故事を用いた。故に、仏典にも、漢籍にも、是等の語は限りもなく多く見出だされる。

一、我が国人は古き昔から是等の書籍を学び、喜んで是等外来の語を用いたから、我が国人の著書に

も、歌謡・語り物の中にも、是等の語は実に多く見られる。その上我が国人は是等の語を本として新しき諺語を作った。また是等の語に関係なく、我が国独特の生活を基礎として新しき故事成語諺語をも作った。我が国人も是等の語を作ることは敢て大陸人にも劣らぬ程に巧妙であった。

一、本書は是等内外の故事成語諺語及び譬喩に古来の名文若干を加え、是に解釈を附するを主とし、また甚だ僅かではあるけれど、難解の地名や、民間伝承の神仏の名など、一見由緒あるらしく見える語をも併せて、適当の説明を附することとした。

一、本書は成るべく僅かの紙数の中に、出来るだけ多くの語を収めたいと思い、同一意義の語は成るべく一所に集めて同時に解釈することとした。また意義は違うけれど相関連する語も同じく同一箇所に集め、ついでを以て解釈を加え、併せて相互対比して理解を深くする方法を取った。

一、故に語の排列は振仮名の如何に拘わらず、発音に従い、五十音順によることとしたけれども、此の順によらぬ語も多くある。読者は巻尾に附した索引によって所用の語を検出して頂きたい。

一、本書の性質上古書の引用は最も多い。この引用に当り、漢文は原(もと)の形のまま載せようとも思ったけれど、今は若き学徒諸君の便をはかり、全部仮名交り文に書き改めた。ただ漢詩ばかりは仮名交りと原形とを併せ掲げた。しかし詩経の詩は仮名交りだけとした。なお是等古書には、今の活

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

字にも辞書にも無いむずかしい文字が多くある。是も最初は全部古書のまま用いようとしたけれども、印刷にも不便であり、今日通用せぬ文字を若き学徒諸君に強いることも無理だと思って、二三は仮名或は現代に行われる文字を以て代用することとした。しかし新鋳の活字を作って古体のまま用いた箇所も多くある。深く研究しようとする人士は、泝って原典を参照して頂きたい。

一、我が国古書の文も便宜新しい仮名などを挿入して、読解し易くした箇所も多くある。

一、引用の書名は読者が原典をひもとく際の便利をはかり、併せて根拠を確実にする為、成るべく章節の名まで記入することとした。是等の書名は或は文の初めに附し、或は終りに附した。終りに附したものには〔　〕を以て囲みをつけ、初めに附したものには何のしるしも附けず、引用文そのものに「　」を用いた。

一、本書の仮名遣いは、引用は旧仮名を用い、説明は大体新仮名によることとした。

一、本書の成るに就いては国漢文教育に経験深き橘宗利氏の教によることが多い。また校正と索引の調製とは多く明治書院編輯部諸賢の助力にたよった。ここに併せて深き感謝の意を表する。

一、本書の稿は昭和二十六年晩夏の頃これを起した。以来三年有半、この間、痩馬ではあるけれども自ら鞭を加えて、出来るだけの努力は傾け尽したつもりである。

一、著者は嘗つて恩師吉田東伍先生の編輯所に通い、国史百科大辞典の編輯に関与したことがある。その当時子子孫孫まで辞書の編纂などに手を出すものではないとつくづく思った。ところが今日自ら進んで此の難事に当ったのも、何かの因縁であろう。今は只生れ出でたる小さき此の子が、世にも笑われず育って行くのを祈るばかりである。

昭和三十年一月二十五日　　千葉縣船橋市の一隅観海楼上にて

著者　高橋源一郎　しるす

本書に用いた符号

= 同じ意味というしるし。
○ 意味は違うけれど相関連する語のしるし。
◎ 補足的説明のしるし。また類似語のしるし。
「」 単語の説明と本文の解釈との境。
『』 引用書名。
〝〟 引用文のしるし。其の他特別な語のしるし。

書名を改めたいきさつ

一、故事成語諺語集解、この書名について、これまで多くの人人から質問を受けて来た。「故事成語諺語」はよろしいが、「集解」という語にぶつかって首をかしげさせるというのである。たしかに「集解」という語は今の世間では、ありふれたものとは言えない。

一、現にしばしば寄せられる質問に一々返答をすることは私どもとしては煩に過ぎるばかりか、せっかく注目された人人に手に取ることにためらいを感じさせたり、親しみにくく思われたりすることは好ましくない。そこで七千項目に及ぶ語句索引がすでに「辞典」の名にふさわしいので「集解」を改めて「辞典」とすることにした。

一、時勢の要望にこたえて書名を改めたいきさつをしるし、かつは大方の諒解を請う次第である。

昭和三十七年八月十日

あ

【嗚呼夙夜に勤めざること或ること罔かれ。細行を矜まざれば終に大德に累ひす。山を爲ること九仞、功、一簣に虧く】 嗚呼は喜んだり悲しんだりする時発する自然の声。感嘆詞という。夙はツトと訓ずる。朝早くという意。夙夜は朝は早くから夜は遅くまでということ。仞はひろ。中国、周の時代の尺度で、八尺とも、七尺とも、四尺ともいう。簣はモッコ、土を運ぶ道具。「朝は早くから、夜は遅くまで一日中德行を勤めよ。小さい行いに気をつけよ。小さい行いが積り積って大なる德行となるものであるから、小さい行いに気をつけ慎まなかったならば、終には大なる德行を成し遂げることが出来なくなる。たとえば山を築くようなもので、九仞まで築いて今一簣というところで怠ったならば、遂には築き終らぬと同じである。僅かの事で永年骨を折って来た德行を傷つけるようなことをするなということ〔書經・旅獒〕。「九仞の功を一簣に虧く」という語は是から出た。

【曖曖たり遠人の村。依依たり墟里の煙】 晉の陶淵明が作った「園田の居に歸る」と題する詩の一節で、田舎の風光を述べたる句。曖曖は曖昧とやや同じく、日の光のぼんやりして明らかでないさま。依依は物に倚り添うさま。墟里は荒れはてた古い村。「空はぼんやり薄霞んで遠い村里は木の間にちらほら見え、煙はゆらゆらと古い荒れた村から立ちのぼるという意。なお是に続いて「狗は吠ゆ深巷の中、雞は鳴く桑樹の顛」とある。正に田舎の風光を写して申分ない句である。深巷は通路から入りこんだ部落。「曖曖遠人村。依依墟里煙。狗吠深巷中。雞鳴桑樹顛」。陶淵明は有名な陶侃の曾孫で、若い時から学問が出来、官に仕えたが人格高潔で上官に媚びることを嫌い、郷里に帰り百姓をやって居った人。故に田園に帰る詩は幾つも作ったが、是はその中の一つ。この詩は「古文眞寶前集」「古詩源」等にある。

【哀哀たる父母、我を生みて劬勞せり】 哀哀は傷み悲しむさま。親のない子を哀子という。」いとしこいしの父母は我を生みて劬労なされた。それが今は歿くなられて誠に誠に哀しさに堪えないという程の意。詩經・小雅・蓼莪の章の一節。蓼莪は親孝行の子が親の死後親の苦労を想い起し、親が生きて居る内に充分孝行することが出来なかったのを傷んで詠んだ詩。この句に続いて同じ章の内に「哀哀たる父母我を生みて勞瘁せり」とある。勞瘁は衰えやつれたということ。前の句と全く同じ意味。この両句は古来有名な親孝行の句で、これを読むごとに泣く者が多かった。晉の王裒という人は、この句を諸生に教える毎に三度くり返して読み、涙を流したという。昔から父母なくして此の句を読んで涙を流さぬ者は人でないと言い伝えて居った。

【あひおひ】 古今和歌集の序に「高砂、住の江の松も、あひおひのやうに覺え」

とある。この語に色色の解釈がある。㊀おいおいに生じて尽きぬという意。㊁相逐いで、追いつ追われつ、おっつかっつという意。㊂同じに生まれ、同じに生長する相生いという意。㊃相老いで、同じに年をとり、同じに老いて行くという意など。新古今集七・大貳三位「あひ生のをしほの山の小松原いまより千代のかげをまたなむ」は、相共に生まれ相共に生長するという意。謡曲・高砂「高砂住の江の、松は非情のものだにも相生の名はあるぞかし。ましてや生ある人として、年久しくも住吉より、通ひ馴れたる尉と姥は、松もろともに此年まで、相生の夫婦となるものを」は、相生い、相老い両方の意。長唄・壽「契りも深き相生の、榮久しき友白髪」も同じ。普通この意味に解せられる。偕老、共白髪と同じ意味。

○〔相生の松〕　謡曲・高砂は播州高砂の松と摂津住の江（今、大阪市内）の松とが相生いで、千年の色香を変えず、御世長久めでたき代に、住の江の松の精なる尉（老人）と、高砂の松の精なる姥（老婆）とが偕老の夫婦となり、高砂にて落葉を掃いて居り、旅人に此の松のめでたき謂れを語ったという筋を叙したもので、天下泰平を讃美した謡である。久しき昔からこの謡は有名で、高砂の松と尉と姥とは、夫婦長久、めでたいためしに引かれ、結婚式の時などにはこの模型を飾り、この謡を謡う習慣になって居る。元来相生の松といえば、高砂住吉両所の松を指すものであれど、何時の頃よりか、特に兵庫縣加古郡高砂神社境内と、その近所尾上村長田とにある、老松のみを指すこととなった。最近まであった高砂相生の松は第三代の植継ぎといわれ、雌松（赤松）と雄松（黒松）とが一株となり、あたかも一株から出たように見えて居った。これからして諸国にも相生の松、相生の杉、相生の公孫樹などが多く出来た。江戸近在では浅草、浅草寺境内の相生公孫樹、亀井戸吾嬬の森の相生の樟などが有名であった。又板橋乗蓮寺後庭の相生の杉は縁結びの杉といわれて居った。俚言集覧には武蔵多摩郡宮本村にも相生の松があり、雌松雄松とも高さ七間あまりあったとある（宮本村、今分らず）。なお「浪華百事談」には、大阪高津神社の東方上本町すじ寳樹寺附近にも相生の松があり、根本一株で、雌雄の幹が伸び、見事であったとある。◎この外にめでたきものに相生の名を冠したものが多くある。生花の相生挿というは、雌松雄松と藪柑子とを取り合せて挿したもの。相生結びというは紐の結び方の一種。江戸長唄相生獅子、能狂言相生神樂などいうものもある。◎第三代高砂相生の松は寛永年間姫路藩主本多忠政の植えたもの。昭和十二年五月、落雷の為少しく損傷、同年九月松喰虫の為枯死。尾上村尾上神社の松も其の後枯死。高砂にては第四代の松を見出し最近移植の筈。

【愛屋烏に及ぶ】　人を愛すればその人の屋根の上に居る烏まで愛らしくなる。反対に憎い時はその家の召使まで憎くなるという意。尚書大傳に「武王夏嘉に登り以て殷民に臨む。周公曰く、其の人を愛する者は其の屋上の烏を愛す。其の人

を憎む者は其の儕習を憎む」とある。儲習は召使のこと。說苑・貴德「武王殷に克ち、太公を召して問うて曰く、將に其の士衆を柰何せんとすと。太公對へて曰く、臣聞く、其の人を愛する者は屋上の烏を兼ね、其の人を憎む者は其の餘習を惡むと」。餘習は儲習と同じ。この愛情を「屋烏の愛」という。＝怒りは水中の蟹にも遷り愛は屋上の烏にも及ぶ〔可笑記・五〕。＝坊主憎けりや袈裟まで憎い。

【愛を立つるは親より始む。民に睦を教ふるなり。敬を立つるは長より始む。民に順を教ふるなり】 愛の道を行うのは親しい者から漸次遠いものに及ぼすようにする。これは民に近親に親睦することを教える所以である。又敬の道を行うのは年長者から始める。民に順序を教える所以だという意〔禮記・祭義〕。書經・伊訓「愛を立つるは惟れ親より始まり、敬を立つるは惟れ長より始まり四海に終る」。

【愛日】 ㊀冬の日光のこと。冬の日は穏やかだから。これに対し夏の日を畏日という。左傳・文公七年、杜預の註に「冬日は愛すべく、夏日は畏るべし」とある。十八史略一・趙にも同じ語がある。是等から出た語。駱賓王の詩に「温煇凌二愛日一。壯氣驚二寒氷一」。とあるも冬日の意。㊁愛は惜と同じ。日の早くたつのを惜むという意。大戴禮・曾子立事篇に「君子は日を愛み以て學ぶ」とあり、亢倉子に「時を敬し、日を愛む」とあり、吳志・吳王五子孫和傳には「志士は日を愛み力を惜む」とある。㊂揚子法言に「孝子は日を愛む」とあり、また「時を敬し、日を愛み、當に孝を盡すべし」とある。是から出て孝子を愛日ともいう。德川時代の儒者佐藤一齋はその居を愛日樓と号した。その詩文を集めたものに「愛日樓文詩」四卷がある。

○〔遲日〕〔凄日〕 冬の日を愛日、夏の日を畏日というに対し、春の日を遲日、秋の日を凄日という。遲日は春の日の暮れるのが遲いから。詩經・豳風・七月に「春日遲遲」とあり、また杜審言の「渡二湘江一詩」に「遲日園林悲二昔遊一」とある。凄日は秋は肅殺（草木を枯らす）の季節であるから。歐陽永叔の秋聲賦には、「其の聲たるや凄凄切切として呼號奮發す」とある。又陶淵明の詩には「秋日凄旦厲」とある。凄日に対し秋の季節を「凄辰」ともいう。

【愛しては其の惡を知り憎みては其の善を知る】 愛しても、その愛に溺れず、悪い所はよく知り、憎んでも善い所があれば、またよくこれを認める。盲目の愛憎に溺れぬこと〔禮記・曲禮上〕。

【あいたロが塞がらぬ】 あきれはて、茫然として居ること。

【あいたロへ牡丹餅】 思いもかけず、偶然に幸福が舞い込むこと。

【愛に順ひて懈らざれば以て百姓を使ふべし。強暴不忠なれば以て一人を使ふべからず】 愛情を基として怠らなければ多くの人を使うことが出来る。強暴にして不忠実ならば一人をも使うことは出来ない〔晏子春秋二・問下〕。

【間の宿】 昔、荷物などを運ぶ伝馬を立てた二つの宿の間にあった小さな宿場。たとえば品川宿と川崎宿との間にあった

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

大森宿の如きもの。伝馬は立てないが小さな宿屋はあった。「間」は間という意。「間の狂言」「間の手」「間の山」「間の土山」などの間皆同じ。◎坂は照る照る鈴鹿はくもる間の土山雨が降る〔俚謡〕。坂は土山宿の西、松尾坂。土山宿は松尾坂と鈴鹿との中間。

【愛は憎の始め、徳は怨の本】 愛するかと思えば何時の間にか変って憎しみとなる。恩徳も過ぐれば何時の間にか怨みと変る。人生愛憎恩怨の変りやすい喩え。管子・牧言「衆人の心を用ふるや、愛は憎の始めなり。徳は怨の本なり。唯賢者は然らず」。充倉子「恩甚しければ則ち怨生じ、愛多ければ則ち憎至る」。

【仰いで天に愧ぢず、俯して人に怍ぢず】 天に向っても、人に向っても、少しも恥かしい点はないという意〔孟子・盡心上〕。＝俯仰天地に恥ぢず。

【青は藍より出でて藍より青し】 染料の青色は藍から取るものだけれども、藍より青いという意味で、弟子が師匠にすぐれた場合などにいう。荀子・勸學篇に「君子曰く、學は以て已むべからず。青は之を藍より取りて而して藍よりも青し。冰は水之を爲して而して水よりも寒し」とある。同書一本には「青は藍より出でて藍より青し。冰は水之を爲して水より寒し」とある。弟子の師匠にまさることを出藍の誉というはこれから出た。慶長見聞集二・浅井源蔵師の恩忘るる事「荀子に、青は藍より出てあひよりも青し。氷は水是をなして水よりもさむしといへり。學文よくつとむれば弟子も師匠にまさる」。

【赤子の手をねぢる】 極めて弱い者をいじめ困らせること。＝盲に耆塲をかける。＝躄に煮茶をあびせる。

【秋財布に春袋】 秋は財布を縫わず、春は袋を縫うがよいということ。秋は空というを忌みきらい、春は張りふくるるというを喜びて起った諺。春は張るだから袋を縫い金を貯えるようにせよ。また空になってはいけないから、秋は財布を縫わぬようにせよという意。

【秋高く馬肥ゆ】 秋深くなれば空は晴れ渡って高く見え、馬も元気よく太る。昔の蒙古民族は、秋になると馬も肥え、弓を射るにも都合よくなるので、勢いを得てよく中国の北方に侵入して来た。漢書・匈奴傳に「匈奴秋に至り馬肥え弓勁し。即ち塞に入る」とある（匈奴は今の蒙古民族。塞は蒙古民族を防ぐ為に設けた中国北方の城塞）。杜審言の詩に「雲淨妖星落。秋高塞馬肥」とある。妖星は悪星。これらの言葉から出た語。我が国では専ら運動行楽の好季節という意に用いる。＝天高く馬肥ゆ。＝天高くして氣清し〔文選・宋玉九辯五首〕。

【明店の恵比須さん】 一人で喜んで居ること。「明店の恵比須さんに御供えをあげたようだ」などという。

【秋田の落し水】 秋になれば水田に水が入用なくなるから畔を切って流し出す。それと同様に飽きて棄てられたという意。秋の扇に同じ。近松浄瑠璃・心中萬年草「五月雨ほどに戀慕はれて終にな、秋田のヨ落し水」。

【秋茄子嫁に喰はすな】 秋の茄子はう

まいから嫁には喰わせるなというのが普通の解釈なれど、秋茄子を沢山喰べると腹痛下痢を起し、子供が出来なくなるから嫁には喰わせるなという意味、ともいう。又秋茄子には種子が少ないから子種が無くなるといけないからだともいう。さらにまた一説には、嫁というは人間の嫁ではなく、鼠のことだともいう。一時軒隨筆「秋茄子わささの糟につけおきてよめにはくれじ棚におくとも」。三養雜記・三「秋茄子わささの糟につけませて棚におくともよめにくはすな」。＝**秋鰍嫁にくはすな。**

【秋の扇】 用がなくなり、捨てられること。漢の孝成帝の宮人班婕妤という婦人が天子の愛を失い、我が身を秋の扇にたとえて詩を作った故事に基づく。其の詩文選にあり、怨歌行と題する。「新裂二齊紈素一。鮮潔如二霜雪一。裁二成合歡扇一。團團似二明月一。出入君懷袖一。動搖微風發。常恐秋節至。涼飈奪二炎熱一。棄二捐篋笥中一。恩情中道絶」。梁の劉孝綽が班婕妤の怨言を詠じた詩に、「妾身似二秋扇一」とある。

【秋の鹿は笛に寄る】 鹿は秋になると雌雄呼びあって鳴く。猟師が鹿笛を吹くと、それに欺かれて寄って来る。それと同様人も弱点に付け込めば直ぐ乗って来るという喩え。◎**女のはける足駄にて作れる笛には秋の鹿必ずよる。**

【商人と屏風は曲らねば世に立たぬ】 商人は自分の感情を曲げて堪忍をしなければ立って行かれないという意。＝**商人と屏風は直にはたたぬ。**「曲らねば世に立たぬ」参照。

【惡源太】 源義朝の長子義平、剛勇にして人に恐れられて居ったから、悪源太と呼ばれた。この悪というは、敢えて悪人という意味ばかりではない。剛勇にして恐るべき人という程の意にも用いる。左大臣藤原頼長才識すぐれ政務を厳格に執り行い、善悪賞罰を正し、世人に恐れられて居ったから、悪左大臣・悪左府などと呼ばれた。悪右衛門督藤原信頼・悪別当平時忠・須藤悪七別当・悪七兵衛平景清・悪禪師源全成・横山悪次・悪五・悪源太土岐頼直・悪三郎武田信忠などの悪皆同じ。悪太郎・悪僧の悪もまた同じ。悪党も悪人という意味ばかりではなく、剛勇無双の人という意味にも用いた。

【惡妻は六十年の不作】 悪い妻を持てば一生涯の不幸だという意。不作は作物の穫れぬこと。易緯「躓づく馬は車を破り、悪婦は家を破る」。＝**一生の患は性惡の妻。**

【惡小なるを以て之を爲すこと勿れ。善小なるを以て爲さざること勿れ】 悪はたとえどんなに小さくても為してはならぬ。善はたとえどんなに小事でも為せという意「蜀志・劉先主傳の注」。易經・繫辭下篇に「小人は小善を以て益无しと爲して爲さず。小惡を以て傷むこと无しと爲して去らず」とある。又淮南子・繆稱訓には「君子は小善は爲すに足らずと謂ひて之を舍てず。小善積もりて大善となる。小不善の傷る無しとして之を爲すを爲さず。小不善積もりて大不善となる」とある。是等と同類の語。

【惡錢身につかず】 不正なことをして

得た金錢はすぐまた失ってしまう。＝貨悖りて入る者は亦悖りて出づ〔大學〕。

【あくつ】 圷の字を充てる。川沿いなどの低い土地。これに対し、高くさし出た土地をアクタ或は塙という。あくつの地名は関東に多くある。栃木縣塩谷郡寶積寺駅附近の阿久津村上阿久津、中阿久津。茨城縣東茨城郡圷村上圷、下圷など。あくつ或は秋津に訛る。東京都北多摩郡東村山村秋津は是。

【惡人を養ふは虎を養ふが如し。當に其肉に飽かしむべし。飽かざれば則ち噬む。惡人を養ふは鷹を養ふが如し。之を餓ゑしむれば則ちつく。之を飽かしむれば則ち颺る】 悪人を養うのは虎を養うと同じで、飽きる迄肉を食わせなければならぬ。さもなければ喰いつく。しかし、又鷹を養うが如くでもある。お腹を空かして置けば従って来るけれど、腹一杯にすれば飛び去る〔故事瓊林〕。○〔饑うれば則ち附き、飽けば則ち颺る。燠なれば則ち趨り、寒なれば則ち棄つ。人情の通患なり〕 燠は暖か、富み栄える意。寒は貧乏。「富み栄えて居れば、取り入り、貧乏になれば棄て去る。それが人情の通弊だ、ということ〔菜根譚・前一四三〕。

【惡人の朝に立ち惡人と言ふは、朝衣朝冠を以て塗炭に坐するが如し】 悪人の多い朝廷に仕え、悪人と話をするのは、朝廷の儀式に著る衣冠を著けて泥や炭の中に坐って居るようなものだという意。孟子・公孫丑上「孟子曰く、伯夷は其君に非ざれば事へず。其友にあらざれば友とせず。惡人の朝に立たず。惡人と言はず。惡人の朝に立ちて惡人と言ふは、朝衣朝冠を以て塗炭に坐するが如し」。塗は泥。伯夷の行いが餘りに清に偏したことをいう語。

【惡人のほろぶるをいたみおもふは鼠の死ぬるをかなしむがごとし】 悪は悪、善は善。善は賞し、悪は憎むべし。悪人に同情するなという意。慶長見聞集六・江戸町境論の事「古人の言葉に惡人のほろぶるをいたみおもふは鼠の死ぬるをかなしむがごとしといへり。然るときむば、道理なくして人の物とるをよしと思ふは、鼠の物くらふをあいするがごとし。是本意にあらず」。

【惡の來るや、己則ちこれを取る】 悪い事の起って来るのは、自分で招くのだという意〔左傳・宣公十三年〕。

【惡の易きや火の原を燎くが如し。鄉ひ邇づくべからず。其れ猶撲滅すべけんや】 悪事の長じ易い事は火が原を燒いて燒け広がって行くようなもので、容易に立ち寄れない。だから撲ち滅すことも出来ないという意。燎は「もゆる」とも訓む〔左傳・隱公六年、同・莊公十四年〕。書經・盤庚上には「胥動かすに浮言を以てす。恐らくは衆を沈めん。火の原を燎くが若く鄉ひ邇づくべからず。其れ猶撲滅すべけんや」とある。浮言は根もない人の噂話。衆を沈めんは多くの人を災難に溺れさせるという意。○〔燎原の勢〕 勢いの甚だ盛んなる喩え。「燎原の火の如し」ともいう。

【あぐり】 男児がほしいと思う時女子

のみ生まれるので「あぐり」という名をつければ、次には男児が生まれるという俗信。また生まれる子が皆死ぬので「あぐり」又は「すて」と名づくれば育つともいう。

【惡は一旦の事なり。勝利ありと雖も、遂には正直にして道理道を行く】 惡は一時の事、たとえ勝つことがあったにしても、最後には正直が勝ち道理が行われる〔曾我物語二・奈良の檀操僧正の事〕。

【擧足を取る】 人のいいそこない、又はやりそこないにつけ込むこと。人が足を擧げたのにつけ込み、その足を取りて倒すという意から出た。

【あげくのはて】 最後に。とどのつまり。結局という意。あげくは擧句または揚句と書く。昔短歌一首を甲乙二人で詠み、甲が上の句十七字を詠めば、乙が下の句十四字を詠んだ。次に丙が上十七字を詠み、丁が下十四字を詠んだ。これを連続して幾首かの短歌を並べ一篇をなした。これを連歌という。また是に若干の滑稽味を加えたものを俳諧歌ともいう。この連歌または俳諧歌で、最初の句を発句といい、最後の句を擧句という。これから転じて擧句は最後または結末という意に用いる。「擧句の果」は同意語の二つ重なったもの。「結句」というも同じ。結句は漢詩最後の句。

【阿衡】 中国殷の時代の官名で総理大臣に似た役目。阿は倚り頼む。衡はハカリで、平正を持するもの。国王が倚頼して世の平正を持するという意。一説には大臣伊尹の号だともいう。伊尹は殷の湯王を助け夏の国を亡ぼし王道を立てた人で、周の太公望、周公などと共に天下良宰相の例に引かれる。これから出て阿衡は良宰相の意にも用いられる。史記・魏世家に「魏阿衡の佐を得と雖も、易ぞ益せんや」とあるは良宰相の輔佐という意。

○〔阿衡の才〕 宰相になり得る才能。

【あごをはづす】 あごが外れる程笑う。大笑いすること。＝**頤を脱す。** 蘇軾の詩「撫掌笑脱レ頤」。＝**頤を解く。**

【あごが干上る】 貧乏して生活が立たなくなる。飯が喰えなくなる。＝**あごを吊す。**

【あこぎ】 伊勢安濃（今の津市）の海上阿漕の浦は伊勢神宮献の魚を捕る所で一般の漁猟は禁ぜられて居る。従ってここには、多くの魚が集まり来った。阿漕菜という漁夫が此所に来り内密に漁をなし、餘り度重なったので遂に捕えられ、この海底に沈められたという伝説がある。この伝説に基づき、詠み人知らず「あふことを阿漕の島にひく網のたび重ならば人も知りなむ」という歌が、古今和歌六帖三にある（この外この伝説を基とした歌・物語が多くある）。これから出て、同じ事を度度すること、飽く事をしらぬこと、貪慾なこと、執拗こと、不法、無茶な事などをあこぎという。太平記二十一・鹽冶判官謫死「さのみ度重ならばこそ、安漕浦に引網の人目に餘る憚も候はめ」。源平盛衰記八・讃岐院の事「あこぎは歌の心なり。伊勢の海あこぎが浦に引網も度重なれば人もこそしれと云ふ心は、彼阿漕の浦には、神の誓にて年に一

度の外は置を引かずとかや」。◎阿漕物語の内では謡曲・阿漕、浄瑠璃・勢州阿漕浦鈴鹿合戦、阿古木草紙など名高い。阿漕が島の所在は今不明。

【あごで人を使ふ】 横柄にかまえて人を使うこと。威張って人を差図すること。頤指・頤使・頤令などともいう。漢書・賈誼傳「今陛下天下を力制し、頤指すること意の如し」。頤は、したあご、おとがい。

【麻を蔬うること之を如何、其の畝を衡縱にす。妻を取ること之を如何、必ず父母に告ぐ】 麻を植える方法は如何したらよいか、まず畝を横縱に耕し鋤きかえす。妻を得る方法は如何にしたらよいか、必ずまず父母に告げてその承諾を求める。それはちょうど麻を植えるのに、畝を縱横に作ると同じく、正しき道によるのだという意。男女人倫の重んずべきをいえる語〔詩經・齊風・南山〕。禮記・坊記「男女媒なければ交らず。幣なければ相見ず。男女の別なからんことを恐るればなり。詩に云はく、柯を伐ること之を如何。斧に匪ざれば克はず。妻を取ること之を如何。媒に匪ざれば得ず。麻を蔬うること之を如何。其の畝を横縱にす。妻を取ること之を如何。必ず父母に告ぐと。此を以て民を坊げども、民猶自ら其の身を獻ずること有り」。「其の身を獻ず」は女子が男子に自ら其の身を献ずること。「柯を伐ること如何」参照。

【朝起きは三文の徳】 朝早く起きれば何かにつけて利益がある。＝**朝起きは七つの徳。**＝**朝起きの家には福來る。**＝**朝起三両始末五両。**

【朝がけの駄賃】 朝は馬の勢いがよいから少し位餘分の荷を負わせても差し支えがない。故についでに豫定外の他人の荷を乗せてやって餘分の賃銀を取る。是から出て苦労なく僅かの間に豫期せぬ利益を得る喩え。駄賃は馬で荷を運んでやった賃銭。

【浅き川も深く渡れ】 浅い川も浅いと思うな。深いと思うて渡れ。念には念を入れよ。油断をしないで世を渡れという意。＝**用心は深くして川は浅く渡れ。**

【朝出た跛には追ひつかぬ】 如何に足弱の者でも朝早く出れば、早足の者に追いつかれない。亀が兎に勝ったと同じ。たとえ少し遅鈍でも勤勉な者が勝利を得るという喩え。

【麻の中の蓬】 麻の中の蓬は自然に真直に生長する。善人に交われば自然に善人となる。荀子・勸學「蓬麻中に生ずれば扶けずして直し」。可笑記巻四「昔さる人の云へるは、最明寺時頼公御つれづれの御當座なりとて、よき人にまじりて惡きことはなし麻の中なる蓬見るにも」。＝**朱に交はれば赤くなる。**

【麻布で氣が知れぬ】 江戸麻布には六本木という町名はある。けれども誰も何処に六本の木があるか知って居る者はないから、人の気が知れぬというにかけて木が知れぬとしゃれたのだという。又赤坂・青山・白金・目黒など赤・青・白・黒の名はあるけれど、黄の字のつく地名は麻布にない。そこで黄が知れぬに気が知れぬをかけたのだともいう。夜の菊花

は麻布で黄が知れぬ〔俚言集覽〕。＝麻布の御方で氣が知れぬ。

【朝風呂丹前長火鉢】朝風呂に入り丹前を著て長火鉢の前に坐すること。即ち安楽な暮しのこと。

【足を翹げて待つ】足を爪だてて待ち受ける。遠からず必ず来ると思って待って居ること。翹は「つまだつ」とも訓む。史記・高祖紀「大臣内に叛き、諸侯外に反せば亡ぶること足を翹げて待つべきなり」。同・商君傳「秦國の君を收むる所以の者、豈其れ微ならんや。亡びんこと足を翹げて待つべし」。又、早く来ればよいと思って待つこと。文選・陳琳檄＝吳將校部曲＝に「功を立つるの士、足を翹げて領を引き、風を望みて響應せざることなし」。翹足・翹企・翹望・翹首などほぼ同じ。何れも待ち設ける意。

【足を洗ふ】悪事をすることを止め正しい人になること。悪い職業をやめ正しい業に就くこと。昔印度で托鉢僧が徒跣で食を乞い歩き、一日の行化を終り自らの庵に帰り、足を洗い法談をしたことから起ったという。

【足を重ねて立ち、目を側てて視る】足を重ねて立ちは、足と足とを重ねて立ち止まり、目を側てて視るは、目に角立てて見ること。或は真直には見ず横目で見ること。甚しく不安の状態でおじおじして居るさま〔史記・汲黯傳〕。漢書汲黯傳には側を仄に作る。

【足を削りて履に適し、頭を殺いて冠に便にす】足が履に合わぬからというて削り、頭が冠に合わぬからというて切り取る。末の事を修めて根本を忘れたる喩え。淮南子・說林訓「養ふ所にして養はるる所を害するは、譬へば猶足を削りて履に適し、頭を殺いで冠に便にするがごとし」。陸游の詩「古人亦有レ言。削レ足以適レ屨」。

【足を知らずして屨を爲れども我れ其の蓑と爲らざるを知る】屨を作る職人は、銘々の人の足を知らないけれど、人の足は大抵似た者だから、用にたつ屨が出来る。屨の形を失って蓑とはならぬ。それと同様、人の性質は大抵似たりよったりだという意。孟子・告子上「龍子曰く、足を知らずして屨を爲れども、我れ其の蓑と爲らざるを知るなりと。屨の相似たるや、天下の足同じければなり」。

【無爲し窮賤を守りて轗軻して長く苦辛すること】つまらぬ事だ。清貧だなんていうて、貧乏して居って不遇の境遇をかこちながら長く苦労するのは。ほんとにつまらぬ事だ、という意。轗軻は不遇の境遇に居ること。文選・古詩十九首「人生寄＝一世＝。奄忽トシテ若＝飈塵＝。何不下策＝高足＝。先據中要路津上。無爲守＝窮賤＝。轗軻長苦辛。」

【足寒くして心を傷り、民怨んで國を傷る】足が冷えると心臓を悪くする。同様に、下に居る人民が上に対して怨みを持つと、国を傷つけるようになる〔古詩源に拠る。史照が通鑑疏に引ける諺〕。

【朝に紅顏有って世路に誇れども、暮には白骨と爲って郊原に朽つ】朝の内は頬を紅くした美少年で世の中に時めいて居っても、夕方になれば、早、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.